



Title	太姒の夢と文王の訓戒：精華簡「程寤」考
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2011, 53, p. 183-198
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太姒の夢と文王の訓戒 — 清華簡「程寤」考 —

湯浅邦弘

序言

二〇〇八年七月、清華大学は香港の古物商から大量の竹簡を購入した。「清華簡」と略称された竹簡群は、第一次調査の結果、二千余枚からなる戦国時代の竹簡であることが判明する。近年公開され世界の注目を集めている竹簡の内、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）が約七〇〇枚、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）が一二〇〇枚。清華簡の分量はそれらをはるかにしのぐ。

竹簡の一部はカビが生えるなど劣化が見られたため、清華大学では、ただちに専門の工作室を設けて洗浄と保護にあたった。その作業が一段落した十月十四日、清華大学主催の竹簡鑑定会が行われ、中国国内の十一名の研究者が招かれた。古文字学研究の権威である裘錫圭氏をはじめ、出土文献研究に実績のある研究者たちが参加し

た。鑑定の結果、これらが間違いなく戦国時代の竹簡であるとの評価を得た。この段階で清華大学は、李学勤氏が清華簡の概要をメディアに公表し、大きな反響を呼んだ。特に、『尚書』『逸周書』に該当すると推測される文献があること、『竹書紀年』に類似した編年体の史書があることなどが注目された。

その後、清華大学では、清華簡の撮影作業に着手。その過程で、竹簡の総数が二三八八枚（残簡を含む）であることも確認された。

十二月、清華大学の委託により、北京大学でC14年代測定が行われた。その結果、清華簡の年代が紀元前三〇五年±三〇年であることが判明し、先の鑑定結果を裏づけた。清華簡も、郭店楚簡や上博楚簡と同じく、戦国時代中期の竹簡であることが科学的に証明されたのである（注し）。

そして、二〇一〇年十二月、『清華大学蔵戦国竹簡「壹」』（清華大学出土文献研究中心与保護中心編、李学勤主編、中西書局）が刊行された。日本に輸入され、筆者がそれを入力したのは、二〇一一年一月二十六日であった。収録されたのは、『尹至』『尹誥』『程寤』『保訓』『耆夜』『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』『皇門』『祭公之顧命（祭公）』『楚居』の九文献。

本稿では、この内の「程寤」を取り上げ、その全体を釈読するとともに、その主題や思想的意義、伝世文献との関係などについて初歩的な考察を加えてみたい。

一、「程寤」釈読

まず、書誌情報を記す。

「程寤」は、竹簡九枚。三道編綫。簡長四五cm。篇題はなく、「程寤」とは、内容に基づいて編者が付けた仮題である^{注2}。清華簡の中には、竹簡背面中央に漢数字を記すものがあり、配列番号であると考えられるが、残念ながら、「程寤」には、この番号は記されていない。原積文の担当者は清華大学の劉国忠氏である。

内容は、これまで『芸文類聚』『太平御覧』などに断片的に引かれていた『逸周書』程寤篇（古逸書）と思われる

る。詳細については、後述するが、おおよそ次のようなものである。

周の文王の妻太姒が、商の朝廷の庭に棘が生え、太子発（後の周武王）が周の王庭の梓を取ってその間に植え、その梓がたちまち松柏棫柞に化したという夢を見た。それを受けて文王が、周の受命を察知するものの、まだ殷の力が強くて自身の存命中には殷を打倒できないことに思いを致し、後に天子となるべき発（武王）に対して、慎重に王朝交代の機を窺えと訓戒する、という内容であると考えられる。

なお、竹簡の配列については、背面に竹簡番号が記されていないため、原積文は、文脈から推測して1〜9の仮番号をつけて配列している^{注3}。但し、すでに復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会（以下、復旦読書会と略称する）から、「1+2+3+4+5+7+6+8+9」に再編すべきだとの修正意見が提出されている^{注4}。ここでは、復旦読書会の意見を妥当として釈読した。

以下、原文、訓読、現代語訳、語注の順に記す。原文は、原積文を基礎に、復旦読書会ほかの意見を参照して、最終的には湯浅が確定したものである。【1】〜【9】は竹簡番号。（ ）内の文字は原積文で隸定された文字を讀

み換えたもの。①②などの丸数字は、湯浅の付けた語注の番号である。

〔原文〕

雉(惟) 王元祀貞(正) 月既生魄、大(太) 娒夢見商
廷佳(生) 棘、迺小子發取周廷梓樹于厥間、化爲松柏棫
柞。【1】寤驚、告王。王弗敢占、詔太子發、俾靈名凶祓。
祝忻祓王、巫率祓太娒、宗丁祓太子發、敝(幣)告【2】
宗方(祓) 社稷、祈于六末山川、攻于商神望承(丞)、
占于明堂。王及太子發並拜吉夢、受商命【3】于皇上帝。
興、曰、「發、汝敬聽吉夢。朋棘敲(棄) 梓、松柏副、棫
覆柞作、化爲臞。嗚呼、何警非朋、何戒非【4】商、何
用非樹、樹因欲、不違材。如天降疾、旨味既用、不可藥、
時不遠。惟商感在周、周感在商。【5】擇用周、果拜不忍、
綏用多福。惟梓敝不義。凡于商、俾行量亡乏。明明在向
(尚)、惟容納棘、意(抑)【7】欲惟柏夢。徒庶言、泄
(肆)引(矧)又(有)、勿亡秋。明武畏、如棫柞亡根(幹)。
嗚呼、敬哉。朕聞周(至)長不貳、務【6】亡勿用、不
忒、思卑臏(柔)和川(順)、眚(生)民不災、喪(懷)
允。嗚呼、何監非時、何務非和、何畏非文、何【8】保
非道、何愛非身、何力非人、人謀彊、不可以藏。後戒、
後戒、人用汝謀、愛日不足。【9】

〔訓読〕

惟れ王の元祀正月既生魄、太娒夢に商廷に棘生じ、迺
ち小子發周廷の梓を取りて厥の間に樹え、化して松柏
棫柞と爲るを見る。

寤めて驚き、王に告ぐ。王敢て占わず、太子發に詔げ
て、靈名をして凶祓せしむ。祝忻王を祓い、巫率太娒
を祓い、宗丁太子發を祓う。宗昉社稷に幣告し、六末山
川に祈り、商神を攻め、望、蒸し、明堂に占う。王及び
太子發並びて吉夢を拜し、商命を皇上帝より受く。

興きて曰く、「發よ、汝敬しみて吉夢に聴え。朋棘 梓
松に棄てられ、棫松柏副い、棫覆い柞作り、化して臞と
爲る。嗚呼、何をか警しむ、朋に非ずや。何をか戒しむ、
商に非ずや。何をか用いる、樹に非ずや。樹は欲すると
ころに困りて、材を違えず。如し天疾を降すも、旨味既
に用いらるれば、棄すべからず、時遠からず。惟れ商の感
いは周に在り、周の感いは商に在り。択びて周に用い、
果拜して忍びず、綏んじ用いれば福多し。惟れ梓は不義
を敝る。商に凡んなれば、行量をして乏す亡からしむ。
明明として尚に在り、惟れ棘を容納するや、抑、惟の柏
夢を欲するや。徒庶言う、肆に長有せんとすれば、秋亡
きこと勿からしむと。武畏を明らかにするは、棫柞に幹

亡きが如し。嗚呼、敬しまんや。朕聞く、至長にして貳
わらざるは、亡に務めて用いる勿ければ、忒さなわず、卑柔
和順を思えば、生民に災あらず、允まことを懷おもうと。嗚呼、何
をか監みる、時に非ずや。何をか務む、和に非ずや。何
をか畏る、文に非ずや。何をか保つ、道に非ずや。何を
か愛す、身に非ずや。何をか力つとむ、人に非ずや。人謀と彊
むれば、以て蔽おほすべからず。後に戒め、後に戒めよ、人
汝が謀を用いければ、日の足らざるを愛おほめ」。

〈現代語訳〉

(周の文)王(即位)の元年正月既生魄に、(文王の妻)
太姒が、商の朝廷の庭一面に棘が生え、そこで太子の発
(後の武帝)が周の宮殿の庭の梓(の苗)を取ってその
中央に植えたところ、たちまち松柏椴柞の木となった、
という夢を見た。

(太姒は)目覚めて驚き、王に告げた。王はすぐには
夢占いをせず、太子の発に告げて、靈名に凶祓(不吉を
払う儀式を)させた。祝忻が王を祓い、巫率が太姒を祓
い、宗丁が太子発を祓った。宗廟社稷に警告し(穀物を
備えて祈り)、六末山川(天地四方と山川の神)に祈り、
商神(殷の神)を祭祀し、望・蒸の儀式を執り行い、明
堂に占って吉夢の占断を得た。王と太子発は並んでその

吉夢を拝し、(衰亡しかけている商に取って代わるよう)
皇々たる上帝より命を受けた。

(文王は)立ち上がって言った、「発よ、慎んで吉夢に
従いなさい。群生した棘が梓や松に棄てられ、梓松柏が
寄り添い(成長し)、椴や柞が繁茂して丹塗り(の立派な
材)になる。徒党に警戒しなければならぬ。商を戒めに
しなければならぬ。樹(適切な人材)を用いなければな
らぬ。樹(人材)は用途を第一にすべきで、材を違えて
はならぬ(適材適所が必要だ)。もし天が災いを降してい
るのに、美食をつくしているようであれば、手の施しよ
うがなく、遠からず滅ぶだろう。商の憂いは周にあり、
周の憂いは商にある。(商の憂いを)選んで周のために用
い、(不要な人材は)我慢せずに果敢に除去し、(有用な
人材を)安らかに用いれば福が多くなる。そもそも梓
は不義を破るものである。それが商に盛んに繁れば、人
々の行動を誤らせることがなくなるであろう。(上帝は)
堂々と上に在り、この棘を容認しているであろうか。そ
れとも、この(松)柏の夢を願っているだろうか。庶民
は言っている、肆中に長く物品を留めようとすれば、し
っかりと実りを収穫しなければならぬ(周の長久を願
うのなら、長期的展望による策略が必要だ)と。武力に
よる恐怖をひけらかすのは、椴柞に幹がないようなもの

だ。ああ慎めよ。私は聞いている、永遠不変であるものは、滅亡の危機に対処して（不適切な人材を）用いることがないから、（人民を）そこなわず、穏和と従順を思うから、人民に災害はなく、（人民は）誠を思うようになる。時を鑑みなければならぬ。和に努めなければならぬ。文徳に畏れ慎まなければならぬ。道を保たなければならぬ。身を愛さなければならぬ。人に尽くさなければならぬ。人間の謀（はかりごと）は努めれば必ず現れるのだから、後々（周が殷を打倒して武王が天子となる時）まで十分に戒めよ。人はお前の計謀に従っていくのだから、時の不足を惜しまなければならぬ」。

〈語注〉

- ① 既生魄……陰暦で月の二週目。既生霸と同じ。『書経』武成篇に「既生魄、庶邦冢君暨百工、受命于周」。王國維『觀堂集林』芸林一・生霸死霸考に「余覽古器物銘、而得古之所以名日者凡四、……二曰既生霸、謂自八、九日以降至十四、五日也」。
- ② 隹（生）棘……原釈文が「隹」と隸定する文字、ここでは字形と伝世文献当該箇所の記事を重視して「生」に読む。
- ③ 棘……いばら。「荊棘」と熟し、困難や紛糾、小人や讒

賊の比喩として使われる。『後漢書』馮異伝に「為吾拔荊棘、當關中」。『楚辭』東方朔・七諫・怨思に「行明白而曰黑兮、荊棘聚而成林」。ここでは、上帝が殷に見切りを付け、殷の滅亡が迫っていることの象徴として使われている。

- ④ 梓……あずき。良質な木材とされ、有用な人材の比喩として使われる。『書経』梓材篇に「若作梓材、既勤樸斲、惟其塗丹雘（梓材を作るに、既に樸斲を勤め、惟れ其れ丹雘を塗るが若し）。ここでは、母の夢の中で、発（後の武王）が群生する棘の中央に植えた木とされている。王権の象徴と推測される。

- ⑤ 松柏……まつとかしわ。長寿や堅い節操の比喩として使われる。『詩経』小雅・天保（臣下が君を祝福する詩）に「如松柏之茂、無不爾或承（松柏の茂れるが如く、爾に承くる或らざるは無し）」。ここでは、発の植えた梓の苗が成長して変化した木とされているので、周王朝樹立の象徴として理解される。

- ⑥ 榦（ヨク、くぬぎ）と柞（サク、たらのき）。「榦」は『爾雅』釈木に「榦、白桜」。郭璞注に「桜、小木叢生、有刺、實如耳瑠、紫赤可啖」。「柞」は『説文』に「柞、柞木也」。「榦」は『詩経』大雅・文王之什の篇名。文王がよく臣下を登用するのを詠じたも

- の。賢人の多いことのとえとしても使われる。ただ、「柞栲」の例は、『詩経』大雅・文王之什・縣に古公亶父（太王）の建国の様をうたい、「柞栲拔矣、行道兌矣。混夷駸矣、維其喙矣（柞栲拔たり、行道兌たり。混夷駸たり、維れ其喙たり）」とあり、また、皇矣に「帝省其山、柞栲斯拔、松柏斯兌。帝作邦作對、自大伯王季（帝其の山を省るに、柞栲斯に拔たり、松柏斯に兌たり。帝邦を作し對を作すに、大伯王季よりす）」とあって、『詩経』では、柞栲は茎や葉に刺のある木々で、抜かれるべきものとして登場することもある。しかし、ここでは、「松柏栲柞」はともに、発の植えた梓の苗が成長して変化した大木とされているので、やはり、周王朝樹立の象徴として理解される。
- ⑦ 靈名、祝忻、巫率、宗丁……いずれも祭祀官の官職名または人名であると推測されるが、詳細についてはよく分からない。
- ⑧ 宗昉……宗祀、宗廟。『左伝』襄公二十四年に「保姓受氏、以守宗昉」。
- ⑨ 商神……商（殷）の守護神。ここで文王が商神を祭祀するのは、当時まだ商の権勢が周を圧倒していたからだと思う。文王は周の受命を革新しつつも、なお商神を尊重しているのである。

⑩ 望……周の山川をのぞんで柴をたき煙をあげて山川の神をまつる。またその祭り。「望祭」「望于山川」（『書経』舜典）。『太平御覽』卷第八十四・皇王部九・周文王引く『帝王世紀』によれば、この時、文王は「程」の地にいたという。そこから遠き山川をのぞんで神を祭ったという意味であろう。

⑪ 蒸……冬の 大祭。収獲した物を盛大に供えることから。

⑫ 商命……商（殷）に嘗て降されていた天命。ここでは、それを文王が拝命したとあるので、商の命運が事実上尽きたことを示唆している。

⑬ 皇上帝……原釈文は「帝」を合文と見て「皇上帝」と釈読する。ここでもそれに従っておくが、後述の関係資料では、「皇天上帝」に作るものが多い。

⑭ 棄……原釈文は「穀」に釈読し、『説文』を引いて「棄」の意とする。他に、隸定字の「戈」字を重視して「伐」に読む可能性もあろう。

⑮ 艘……丹塗りの立派な材。『書経』梓材篇に「若作梓材、既勤樸斲、惟其塗丹艘」。

⑯ 徒庶言、泄（肆）引（矧）又（有）、勿亡秋……難解な箇所である。ここでは、王寧「読清華簡《程寤》偶記一則」(二〇一一年一月二十八日、http://www.gwz.fudan.edu.cn/Show.asp?Src_ID=1389)が「徒庶言」「泄（肆）」

矧(長)有、勿亡秋』と釈し、「文王引用庶民的俗語説、要想市肆上貨物長久充裕、就不能沒有穫」と訳すのに従う。

⑰周(至)長不貳……原釈文は、『詩経』鹿鳴の伝に「周」を「長」と訓ずる例を指摘し、「至長不貳」と釈する。

⑱忌……基(そこなう、いむ、にくむ)の古字。

⑲愛日不足……『書経』周書・泰誓中に「我聞、吉人為善、惟日不足。凶人為不善、亦惟日不足」。

二、「程寤」の主題と思想史的意義

それでは、この文献の主題や思想史的意義はどのように考えられるであろうか。

まず、太姒の見たとされる夢自体については、後述のように、これまでも『潜夫論』や類書の断片的引用などによって知られてはいた。ただその記述は極めて簡略であった。これに対して、清華簡「程寤」では、この夢に周の文王がどのように対処したのか、また、発(後の武王)にどのような訓戒を述べたのが詳細に記されている。

また、従来の資料でも、商庭に棘が蔓延したこと、発(後の武王)がその間(中央)に植えた梓が松柏椽柞と

なったこと自体は記されていたが、その意味について解説したものではなかった。「程寤」では、その後の文王の言葉から、それぞれの樹木(植物)が次のような比喩になっていると理解される。

棘……商の末期的症状。王権が衰微し命運が尽きかけている様。

梓……商に代わって伸びゆく周の勢力。発が後に商を打倒し、天子となることの象徴。

松柏椽柞……商を圧倒して成長する周の未来。周王朝確立の象徴。

この夢を文王は、直ちには吉夢とは考えず、各種のお祓いや祭祀をしてから明堂において改めて夢占いに供している。これまでの資料では、このプロセスを説明するものはほとんどなかった。これは、夢の内容があまりにも重大であったために記す必要があったと思われるが、後の資料では、夢自体に注目が集まり、省略されたと推測される。

そして、その夢に対する占断の結果は「吉夢」であった。文王の元年に、商庭に棘が生え、発の植えた梓が棘を圧倒して大木に成長するというのは、殷の衰亡と周の

受命を象徴するもので、周にとつては基本的には吉夢である。また、文王は発言の中でも、「如し天疾を降すも、旨味既に用いらるれば、菓すべからず、時遠からず」とか、「明明として尚に在り、惟れ棘を容納するや」のように、商の衰退滅亡の可能性に言及している。

これが「程寤」の一つの主題であろう。従来の資料でも明らかなように、この夢は周の受命の象徴として捉えられるのである。

ただ、従来の資料には全く見られなかった文王の訓戒は、どのような意味を持つのであろうか。文王は、太姒の夢の内容の主体が発（武王）であることに思いを致した。この夢を見たのは太姒であり、文王自身ではない。また、夢の中に登場して重要な役割を果たすのは梓を植えた発なのである。すなわち、この夢は周の受命を象徴する吉夢ではあったが、文王自身の存命中には王朝交代が成し遂げられず、後の発によって周王朝が樹立されることを象徴していた。そのことに文王は気づいたのである。

事実、文王は、殷の末期に「西伯」として人望を集め勢力を拡大したが、讒言にあつて羑里に幽閉され、その後、殷の紂王に多くの貢ぎ物を贈つてようやく幽囚を解かれるなど、苦汁の日々を送つたのち亡くなつた（注5）。

文王の存命中には、遂に王朝交代は果たせなかつたのである。

ただ、「商の感うんいは周に在り、周の感うんいは商に在り」と文王が言つているように、商の最大の憂いは周の勢力であつた。周は商の権勢の前に雌伏を余儀なくされていたが、その商を打倒すべき最有力候補は、他ならぬ周だつたのである。

そこで文王は、発に対して、人材の選択を誤つてはならないこと、身を慎んで人民のために尽力しなければならぬこと、殷打倒の「謀」（計画）が露見しないように慎重に事を進めること、などについて長々と訓戒したのである（注6）。この点は、従来の資料からは全く窺い知られることのなかつた内容である。

従つて、この文献は、後の周王朝の為政者が、自らの受命（殷周革命）の正当性を主張するために制作したものと、まずは推測される。と同時に、文王の深謀遠慮を顕彰するために記したものと考えられる。文王は受命して王号を称しながら、その後、捕らえられて羑里に幽閉され、自らは殷王朝の打倒を果たせず、その意志を子の発に密かに訓戒したのであつた。この訓戒の部分こそ、これまで伝えられてこなかつた「程寤」の最大の特質なのである。

さらに、後世の儒家から見た場合、この文献は、やはり二つの意味で、大きな意義を有していたことになる。一つは、儒家の理想とする周王朝が夢を媒介とする形でまさしく受命していたことを明らかにするという点である。

『書経』武成篇には殷周革命の記事が見える。牧野の戦における武王の軍事行動はすさまじかったと記されている。戦死者が膨大な数にのぼり、流血に盾が浮かんだというのである。こうした過激な武力行使は、周王朝を讃える儒家から見れば、一種のトラウマともなりかねない。そこで『孟子』は、紂王のような「不仁」者を有徳な武王が討つのに、なぜそのような過激な戦闘となろうかと反論し、「盡信書、則不如無書（尽く書を信ぜば、則ち書無きに如かず）」（尽心下篇）と述べて、歴史記述をすべて信用してはならないと弁解した。

従って、夢を媒介とする受命がすであつたというのは、後世の儒家にとって、極めて都合のよい伝承となつたであろう。武王による軍事的勝利は一つの結果に過ぎず、事実上の王朝交代はすでに文王の時に約束されていたことになるからである。

また、「堯舜禹湯文武」と連称される歴代聖王の中でも高く評価される文王が、自らは王朝交代を実現できない

ことを悟りながらも、来たるべき時に備えて発（武王）に密かに訓戒していた。こうした伝承は、文王の人徳と知謀を高く評価するものとして儒家に受け止められたであろう。

三、「程寤」の行方

しかし、「程寤」の内容は、その後、失われ、正しく伝えられてこなかった。そこで次に関係文献資料との比較を通して、「程寤」がその後どのように伝えられていったのかを整理し、また、そこから逆に、清華簡「程寤」の意義を改めて検討してみることしよう。

まず、主な関係資料を、①②まで列挙しておく。

①『潜夫論』夢列篇

且凡人道見瑞而修德者、福必成、見瑞而縱恣者、福轉為禍。見妖而驕侮者、禍必成、見妖而戒懼者、禍轉為福。是故太姒有吉夢、文王不敢康吉、祀於群神、然後占於明堂、並拜吉夢。修省戒懼、聞喜若憂。故能成吉以有天下。

②『博物志』卷八

大妣夢見商之庭產棘、乃小子發取周庭梓樹、樹之闕間、梓化為松柏槭柞。覺驚、以告文王。文王曰、慎勿言。冬日之陽、夏日之陰、不召而萬物自來。天道尚左、日月西移、地道尚右、水潦東流。天不享于殷、自發之生於今十年、夷羊在牧、水潦東流、天下飛蝗滿野、命之在周、其信然乎。

③『芸文類聚』第七十九卷·靈異部下·夢

周書曰、大妣夢見商之庭產棘、太子發取周庭之梓樹於闕、梓化為松柏槭柞。寐覺、以告文王。文王乃召太子發、占之于明堂。王及太子發、並拜吉夢、受商之大命于皇天上帝。

④『芸文類聚』第八十八卷·木部上·松

周太似夢周梓化為松。

⑤『白氏六帖』夢

樹梓 周書、太妣夢見商之庭產棘、小子發取周庭之樹、梓化為松柏槭柞。驚寤、告文王。文王召太子、占之於明堂。王乃與太子發並拜吉夢、受商之大命於皇天。

⑥『太平御覽』卷第八十四·皇王部九·周文王

帝王世紀曰、文王昌龍顏虎肩、身長十尺、胸有四乳、晏朝不食、以延四方之士。文王合六州之諸侯以朝紂、紂以崇侯之讒而怒、諸侯請送文王、棄于程。十年正月、文王自商至程。太妣夢見商庭生棘、太子發取周庭之梓樹之于闕間、梓化為松柏槭柞。覺而驚、以告文王。文王不敢占、召太子發、命祝以幣告于宗廟群、神然後占之于明堂。及發並拜吉夢、遂作程曆。

⑦『太平御覽』卷第三百九十七·人事部三十八·吉夢上

周書曰、文王去商（商、以下同じ）在程、正月既生魄、大妣夢見商之庭產棘、小子發取周庭之梓樹乎闕間、梓化為松柏槭柞。寤驚、以告文王。王及太子發並拜吉夢、受商之大命于皇天上帝。

⑧『太平御覽』卷第五百三十三・禮儀部十二・明堂

周書稱、文王在程、作程牀・程典。

又程牀曰、文王在翟、太姒夢見商之庭產棘、小子發取周庭之梓樹於闕間、化為松柏棗柞。驚以告文王。文王曰召發于明堂、拜告(吉)夢受商之大命。

⑩『爾雅翼』卷十二

周之興、大姒夢見商之庭產棘、小子發取周庭梓樹、植之于闕間、梓化為松柏柞棗。覺驚、以告文王。文王曰、「勿言。冬日之陽、夏日之陰、不召而物自來」。以為宗周興王之道。

⑨『冊府元龜』卷二十一・帝王部・徵心

周文王父季曆之十年、飛龍盈於殷之牧野、此蓋聖人在下位將起之符也。及為西伯、作邑于豐。文王之妃曰太姒、夢商庭生棘、太子發植梓樹於闕間、化為松柏柞棗、以告文王。文王幣告羣臣、與發並拜吉夢。

⑩『冊府元龜』卷八百九十二・總錄部・夢徵

周文王去商在程。正月既生魄、太姒夢見商之庭產棘、小子發取周庭之梓樹於門間、梓化為松柏柞棗。寤驚、以告文王。文王及太子發並拜吉夢、受商之大命於皇天上帝。

⑪『詩經』大雅・文王之什・皇矣「居岐之陽」正義

- ・梓↓(化) ↓松柏(栢) 棗柞 ②⑤⑦⑧⑨⑩
- ・梓↓(化) ↓松柏(栢) 柞棗 ⑥⑫
- ・梓↓(化) ↓松 ④

これらの資料は大同小異であるとも言えるが、それぞれ微妙な相違点があるので、以下では、いくつかの項目に分けて、その異同を整理しておきたい。

(一) 樹木の変化について

まず、太姒の夢に登場する発が植えた梓であるが、この梓がどのように変化したのかという観点から、整理してみると次のようになる。

・具体的な樹木には言及せず ①

基本構造はほぼ同じであり、ほとんどの資料は梓が松柏(栢) 椴柞に化したと記している。ただ、④の『芸文類聚』は「松一部に収録されたため、「栢椴柞」が夾雑物として意図的に排除されたと考えられる。類書特有の例外的な収録としておくべきであろう。また、①の『潜夫論』は、樹木の名に言及しないが、これは、『潜夫論』の主旨が別のところにあったことを示唆している。この点については後述する。

(二) 夢見の後の展開について

次に、太姒がこの夢を見た後、文王がどのような行動をとったのか、という点から整理してみると次のようになる。

- ・太姒の夢↓(占わず) ↓幣告など↓明堂に占う↓吉夢を押し大命を受ける ⑥
- ・太姒の夢↓祭祀↓明堂に占う↓吉夢を押し↓修徳に努めた結果天下を得た ①
- ・太姒の夢↓明堂に占う↓吉夢を押し大命を受ける ③
- ⑤
- ⑧

・太姒の夢↓幣告↓吉夢を押し(受命のことは記さず) ⑨

・太姒の夢↓吉夢を押し大命を受ける ⑦⑩⑫

清華簡「程寤」に最も近いのは、⑥の『太平御覽』所引『帝王世紀』である。それ以外のものは、この型を基本にした簡略型であると考えられる。一方、やや異なるのは、やはり①の『潜夫論』である。ここに発(武王)は登場しない。吉夢を得た文王が修徳に努めた結果、天下を得た旨が記される。

(三) 文王の言葉について

こうして吉夢を得た文王は、清華簡「程寤」では、発に対して訓戒を述べたことになっているが、他の資料ではどうであろうか。

- ・程寤の文言(文王の訓戒)なし ①③④⑤⑦⑧⑨⑩
- ・程寤を作ったことのみ記す(内容は記さず) ⑥⑪
- ・文王の発言が一部あるが、この清華簡「程寤」とは異なる ②⑫

このように、従来の資料からは、文王の発言の詳しい

内容は全く知られることがなかった。②の『博物志』と⑩の『爾雅翼』では、「慎勿言（慎んで言うこと勿かれ）……」「勿言（言うこと勿かれ）……」という文王の言葉が記される。これは、文王が周の受命という夢の重大性に鑑みて、こうした夢を見たこと自体と王朝交代実現までの計謀とを嚴重に秘匿せよと述べたものである。「程寤」における文王の訓戒の主旨に類似するが、やや簡略な発言となっている。従って、文王の訓戒の全容を知ることができるといえるのが、何にも増して、清華簡「程寤」の重要な意義なのである。

結語

本稿では、新たに公開された清華簡「程寤」について、その全体の釈読を行い、基礎的な考察を試みた。

程寤とは、殷の末期、程の地に追放されていた周の文王が、即位の元年、妻太姒の見た夢に鑑み、太子の発（後の武王）に訓戒するという内容である。

文王がこの夢を重く受けとめ、嚴重な祭祀を経た後、占断に供した上で、長々と発（武王）に訓戒を述べたのは、文王自身ではなく、発が梓を植えて、それが大木に成長したという内容に注目したからであろう。この夢を

文王は、殷の命運が尽きかけているものの、自身の存命中に王権の交代はまだなく、後の発によって周王朝が樹立されることの象徴と理解したのである。

そこで、殷の過ちを繰り返さないように、身を慎んで人民のために尽くし、慎重に計謀を進行させて殷を打倒して、周の王権を確立するよう発に訓戒したわけである。こうした文王の深謀遠慮のさまが、夢を媒介とする周の受命とともに、本文献の重要な主題となっている。

しかし、後の資料では、この「程寤」の大梓（太姒の夢の部分のみ）が伝えられるようになったため、後半の主題が分からなくなった。その結果、各種類書のように、この夢の部分だけを単に「吉夢」の例として記したり、『潜夫論』のように、吉夢を見ても身を慎まないと本当の福は得られないという道徳論として語ったりするようになってしまった。こうして「程寤」の真の主題は伝わらなくなったのである。

その他、主題からはやや外れるかもしれないが、この「程寤」には、思想史研究の視点から重要な特色がいくつも見いだせる。

まず、母（太姒）の見た夢を媒介として新王朝の受命が語られるのは、孔子生誕の伝承などと類似する。時代は下がるが、『聖蹟図』にまとめられた孔子生誕の伝承によ

れば、孔子は、そもそも母顔徴在が尼丘に祈つて授かった子だとされている。また、孔子が生まれる前、麒麟がやつてきて口から玉書を吐き、そこには「水精の子が、衰えた周を継いで素王となる（水精子継衰周而素王）」と記されていた。そして、その十一月後に、孔子が生まれたのである。また、魯の襄公二十二年十一月、孔子が生まれる夕べ、二匹の龍が屋敷の上をめぐり、五人の老人（五星の精）が庭に降りてきた。そして、孔子を生んだ顔徴在の部屋には、天上の音楽が響いてきて、「天が感応して聖なる子を生む（天感生聖子）」という声が聞こえてきた。孔子には、通常の人とは異なる徴が四十九箇所もあり、胸には「製作定世」という文字が記されていたという。このように孔子は不思議な出生譚をもって生まれたとされる。従つて、後の儒家には、この「程寤」

が周王朝の正当性を主張する伝承として捉えられたと同時に、孔子の生誕受命説話と重なって見えていた可能性も考えられる。

また、受命や王権の確立を樹木によつて語るという宗教性も注目される。『史記』殷本紀によれば、殷の政道が衰えて、帝太戊が立ったとき、奇怪な現象が生じた。それは、桑と穀とがからみあつて朝廷の庭に生じ、その日の夕方には両手で抱えるほどの大きさになつたという事

件である。そこで、帝太戊は恐れて宰相の伊陟にその訳を問い、伊陟の諫言に従つて徳を修めたところ、その怪木は枯れてなくなつたという^注。このように、樹木は王権の成長や衰徴を象徴しているのである。清華簡「程寤」において、棘、梓、松柏槭柞などが重要な役割を果たしていることが改めて確認できるであろう。

更に、こうした内容を持つ「程寤」が『逸周書』の一篇であつたとすれば、『逸周書』の成立や文獻的品格を考える上で重要な手がかりとなろう。今回発見された清華簡は、前記のように、郭店楚簡・上博楚簡と同じく、戦国時代中期の竹簡（写本）であることが確認されている。とすれば、その成立は当然それより前、恐らくは戦国時代の前期以前ということになろう。このことは、『逸周書』の成立を直ちに戦国前期以前とする論拠にはならないとしても、その素材自体の成立は相当早かつたことを示唆していると思われる。また、『逸周書』は一人一時期の著作ではなく、雑然とした編纂物だと評されることもあるが、そこには一定の編集の意図があつた可能性も考えられる。すなわち「程寤」のように、周の受命という大事件や、文王の権謀術数と言つてもいいような智謀を顕彰する書であつたという点も指摘できるであろう。

このように、清華簡「程寤」は、これまで知られるこ

とのなかつた重大な事実をいくつも我々に突きつけたのである。

注

- (1) 筆者を含む研究グループ「中国出土文献研究会」は、二〇〇九年九月、清華大学を訪問し、清華簡を実見する機会に恵まれた。その詳細については、拙稿「清華大学竹簡と先秦思想史研究」(『中国研究集刊』第五十号、二〇一〇年一月)参照。
- (2) 本文献が「程廌」と称される理由については、後述の『太平御覽』卷第八十四・皇王部九・周文王所引『帝王世紀』に詳しい。
- (3) 『清華大学藏戦国竹簡「壹」』所収の文献の内、『尹至』『尹誥』『善夜』『金滕』『皇門』『祭公』には、竹簡背面に漢数字の番号が記されている。これは恐らく竹簡の誤脱・錯簡を防ぐための配列番号であると思われる。
- (4) 「清華簡《程廌》簡序調整一則」(二〇一一年一月五日、http://www.gwz.fudan.edu.cn/Show.asp?Src_ID=343)
- (5) 『史記』周本紀に、「西伯曰文王、遵后稷・公劉之業、則古公・公季之法、篤仁、敬老、慈少。禮下賢者、日中不暇食以待士、士以此多歸之。伯夷・叔齊在孤竹、聞西伯善養

老、盡往歸之。太顛・閔夭・散宜生・鬻子・辛甲大夫之徒皆往歸之。崇侯虎譖西伯於殷紂曰、「西伯積善累德、諸侯皆嚮之、將不利於帝」。帝紂乃囚西伯於羑里。閔夭之徒患之。乃求有莘氏美女、驪戎之文馬、有熊九駒、他奇怪物、因殷嬖臣費仲而獻之紂。紂大說、曰、「此一物足以釋西伯、況其多乎」。乃赦西伯、賜之弓矢斧鉞、使西伯得征伐。曰、「譖西伯者、崇侯虎也」。西伯乃獻洛西之地、以請紂去炮烙之刑。紂許之。……西伯崩、太子發立、是為武王」。

(6) これを受けるかのように、武王の軍事行動は慎重に行われている。『史記』周本紀に「是時、諸侯不期而會盟津者八百諸侯。諸侯皆曰、「紂可伐矣」。武王曰、「女未知天命、未可也」。乃還師歸」と、一旦は挙兵を断念している。

(7) 「帝太戊立伊陟為相。亳有祥桑穀共生於朝、一暮大拱。帝太戊懼、問伊陟。伊陟曰、「臣聞妖不勝德、帝之政其有關與。帝其修德」。太戊從之、而祥桑枯死而去」(『史記』殷本紀)。

[附記] 本稿は、日本學術振興會科學研究費補助金基盤研究(B)「戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究」(研究代表者、湯淺邦弘)による研究成果の一部である。

なお、本稿校正中の二〇一一年五月十日、筆者は中国の武漢大学簡帛研究中心で、本稿の内容の一部に基づく講演を行った。その際、武漢大学の陳偉教授より、次のような示教を

賜った。「程寤」の伝承は、先秦時代には複数あり、必ずしも清華簡「程寤」の内容だけが十全なものとして存在していたわけではないのではないかと、確かにそうした可能性も充分に考えられる。特に、本稿でも取り上げた伝世文献の記述②⑩の文王の発言部分が清華簡と若干異なる点は、「程寤」の伝承過程が今少し複雑だった可能性を示唆していよう。筆者も、現段階では、そうした可能性を決して否定するものではない。しかしながら、少なくとも、清華簡「程寤」に見えるような文王の訓戒が極めて詳細であること、そしてその後そうした伝承が失われてしまったこと、は事実である。